

# 晩産カップルの人生設計への意識

— 35歳以上で子どもをもった40～50代既婚男女へのアンケート調査より—

上席主任研究員 北村 安樹子

## 目次

1. はじめに	12
2. 子どもの出産で意識したこと	13
3. 人生設計の実施状況とその効果	14
4. まとめ	19

## 要旨

①ライフコースの多様化にともなって、35歳以上で出産する女性が増えている。一般に、経済面での人生設計を考える場合、末子の成人や独立時期を意識して資金計画を行っていく必要があるが、晩産型のライフコースを歩む人々のうち、子どもの出産時にそれら意識した人はどの程度を占めるのか。本稿では妻が35歳以上で子どもをもった40～50代の晩産カップルを対象とするアンケート調査から、人生設計に関する意識を探った。

②子どもの出産に関して意識したこととして「子どもが成人したときの自身の年齢」をあげた人は女性で46.7%、男性で39.5%を占めた。女性では「自分の健康・体力」(43.9%)が僅差でこれに続いた一方、男性では「自分の収入の見通し」(35.1%)や「自分の貯蓄」(34.6%)が上位を占めた。「配偶者の健康・体力」を意識したと答えた人は、女性で24.6%、男性では11.8%にとどまった。

③人生設計の実施状況をみると、設計済と答えた人は男性で23.2%、女性で17.1%であった。性・末子の学齢別に比較した場合、男女とも末子が小学生の人では「現在考えているところである」と答えた人が他の学齢の人に比べて多く、男女とも3割を超えるが、末子が高校生以上の人においても、男性の約半数、女性の4割強が未設計の状況にある。

④人生設計の効果についてたずねたところ、最も多くあげられたのは男女とも「人生に必要な費用を確認できる」であり、男性で約4割、女性で6割弱を占めた。一方、「自分(家族)の健康面でのリスクを意識できる」は男女とも2割に満たなかった。晩産カップルの人生設計では、子どもの独立や成人の時期を意識した資金計画とともに、加齢ともなう自分や家族の健康リスクも十分考慮することが重要になる。

キーワード：晩産カップル、人生設計、ライフコース

## 1. はじめに

### (1) 35歳以上で出産する女性の増加

晩婚・晩産化の進行にともなって、わが国では35歳以上で出産する女性が増えている。厚生労働省の人口動態統計によれば、35歳以上の女性による子どもの出生数が出生数全体に占める割合は2015年で28.1%と、約20年前にあたる1995年の水準を20ポイント近くも上回っている（図表1）。

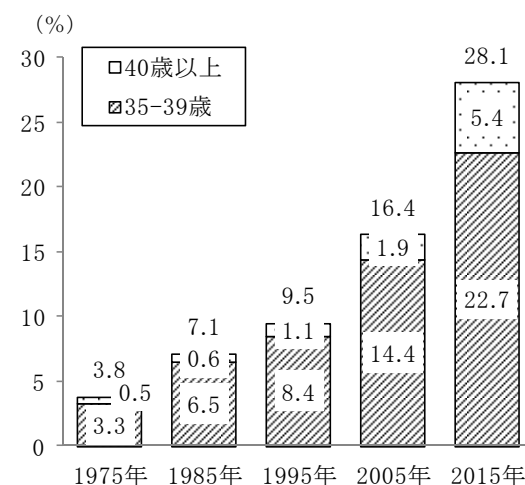
一般に、経済面での人生設計を考える場合、「子の教育費」「住宅購入費」「老後の生活費」が人生の三大費用とされている\*1。しかし、晩産型のライフコースでは、「子の教育費」に関する支出のピークが後ろずれするために、「老後の生活費」を十分準備できない状況で60代を迎えるケースも少なくない。例えば親が20歳代後半のときに末子をもつライフコースの場合には、50歳前後には子どもの独立の時期が訪れて、50歳代を老後の生活費を蓄えるための時期として想定することができる。一方、親が40歳前後のときに子どもをもつライフコースの場合には、子どもの独立の時期が60歳前後になるため、50歳代は子どもの教育費や住宅費の負担を抱えながら、同時に老後の生活費を蓄える資金計画が必要になる場合がある。このため晩産型のライフコースでは、経済面での人生設計に関して、より若い年齢で子どもをもつライフコース以上に、将来、末子が成人する時期や子どもが独立する時期を早くから意識して資金計画を行っていく必要がある。

また、40～50歳代にかけての中高年期は、自身や配偶者が健康問題に直面したり、高齢となった親に介護が必要になる人が増える時期でもある。特に、晩産型のライフコースでは、子育て期間の後ろずれによって、より若い年齢で子どもをもつ場合以上に、子育てと親の健康・介護問題が重なる可能性が高い。

加えて日本では、夫婦にとって親が子育ての重要な支援者になっているケースが少なくない。また、そのような場合に限らず、親が健康でいたり、精神的な支えていたからこそ成り立っていた日々の生活が、親に介護や見守りが必要な状況となったことで変更を余儀なくされる場合もあるのではないだろうか。

では、晩産型のライフコースを歩む人々のうち、出産時に子どもの独立や成人の時期、あるいは子育ての期間中に家族に介護が必要になる可能性を意識した人は実際にどの程度の割合を占めるのか。

図表1 35歳以上の女性の出生数割合の推移



注：厚生労働省「人口動態統計」より筆者作成

本稿では、35歳以上で子どもをもった既婚男女\*<sup>2</sup>を対象とするアンケート調査から、晩産型のライフコースを歩む人々の人生設計に関する意識を明らかにする。

## (2) 調査概要

調査対象者は、妻が35歳以上で出産した40～59歳の男性会社員595名、および夫が会社員で自身が35歳以上で出産した40～59歳の女性492名の計1,087名である(図表2)。以下本稿では、妻が35歳以上で子どもをもったこれらの40～50代の男女を「晩産カップル」と表記する。なお、対象者を男性会社員とその妻に限定した理由は、世帯単位での資金計画を考える場合の条件をできるだけ統一するためである。

回答者の性・就労形態と、調査時点における末子の学齢、末子出産時の妻の年代の分布は図表3に示す通りである。末子出産時の妻の年代については、男女とも8割前後が35～39歳であり、40歳以上の人は男性で25.0%、女性で16.9%であった。

図表2 アンケート調査の概要

調査名	子育てと人生設計に関する調査
サンプル	妻が35歳以上で出産した40～59歳の男性会社員595名、および夫が会社員で自身が35歳以上で出産した40～59歳の女性492名(計1,087名)
調査方法	インターネット調査(株式会社クロス・マーケティングのモニター)
調査時期	2016年10月31日～2016年11月4日

図表3 回答者の属性(全体、性・就労形態、性・末子の学齢、性・末子出産時の妻の年齢)

(単位:%)

	就労形態			末子の学齢				末子出産時の妻の年齢	
	正社員	パート等	無職・ 専業主婦	就園前	小学生	中学生	高校生 以上	35～39歳	40歳以上
全体(n=1,087)	70.4	10.9	18.7	32.5	37.3	13.2	17.0	78.7	21.3
男性(n=595)	100.0	-	-	26.4	38.2	13.6	21.8	75.0	25.0
女性(n=492)	34.6	24.2	41.3	39.8	36.2	12.8	11.2	83.1	16.9

## 2. 子どもの出産で意識したこと

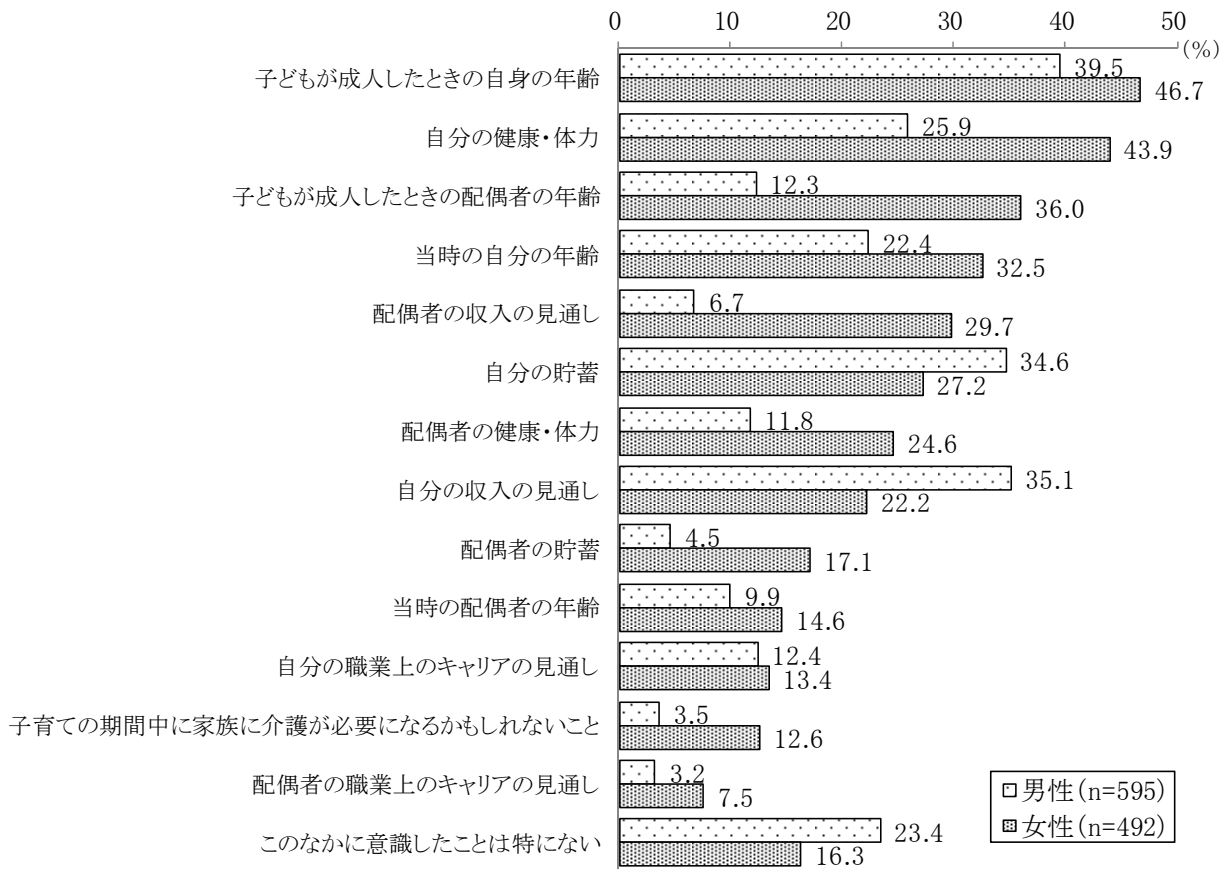
はじめに、晩産カップルの男女が、子どもの出産に際して意識していたことについての回答結果をみる(図表4)。まず、子どもの出産に関して「子どもが成人したときの自身の年齢」を意識したと答えた人は、女性で46.7%、男性で39.5%であった。男女ともすべての項目の中で最も多くあげられたものの、この点を意識したと答えた人は晩産カップルの男女の半数に満たないことがわかる。

女性では「自分の健康・体力」(43.9%)が僅差でこれに続き、「子どもが成人したときの配偶者の年齢」(36.0%)、「(子どもの出産)当時の自分の年齢」(32.5%)などが上位を占めた。一方、男性では最も多くあげられた「子どもが成人したときの自身

の年齢」(39.5%)に続いて、「自分の収入の見通し」(35.1%)や「自分の貯蓄」(34.6%)が上位を占めた。女性では年齢や自分の健康・体力に関すること、男性では年齢に加えて、収入や貯蓄などの資金計画にかかわることを意識した人が多くなっている。

このようななか、「配偶者の健康・体力」を意識したと答えた人は、女性の24.6%、男性の11.8%にとどまった。男女とも自分の健康や体力を意識した人に比べて、配偶者の健康・体力を意識した人の割合は低い傾向にある。また、「子育ての期間中に家族に介護が必要になるかもしれないこと」を意識したと答えた人は、女性の12.6%、男性の3.5%にとどまった。

図表4 子どもの出産に関して意識したこと(性別)＜複数回答＞



### 3. 人生設計の実施状況とその効果

#### (1) 人生設計の実施状況

続いて、回答者の人生設計の実施状況についての回答結果をみる(図表5)。

当研究所が発行する『ライフデザイン白書』では、人生設計について、「経済計画だけでなく、仕事や学業、家庭生活、余暇生活、老後の生活などすべての面を含んだ『自分の生涯総合計画(ライフデザイン)』と定義している。今回の調査ではこの定

義を示した上で、「あなたご自身は、現在人生設計を立てていると思いますか」という設問文により回答者の人生設計の実施状況をたずねた。その結果、設計済の人は、男性で23.2%、女性で17.1%であった。男女とも最も多くあげられたのは「気にはしているが、あまり考えていない」であり、男性で36.0%、女性では42.3%を占める。

性・末子の学齢別に比較した場合、末子が小学生の人では「現在考えているところである」と答えた人が他の学齢の人に比べて多く、男女とも3割を超える。また、末子の学齢にかかわらず、未設計の人が設計済の人を大きく上回り、末子が高校生以上の人においても、男性の約半数、女性の4割強が未設計の状況にある。

図表5 人生設計の実施状況(全体、性別、性・末子学齢別)

(単位:%)

		設計ほとんどできていない	ある程度設計ができていない	現在考えている	気にはしているが、あまり考えていない	まったく考えていない	設計済	未設計	
全体		2.2	18.2	28.7	38.8	12.1	20.4	50.9	
性別	男性	2.7	20.5	27.1	36.0	13.8	23.2	49.7	
	女性	1.6	15.4	30.7	42.3	10.0	17.1	52.2	
性・末子の学齢別	男性	就学前	2.5	22.9	26.8	36.3	11.5	25.5	47.8
		小学生	2.6	16.3	32.6	33.5	15.0	18.9	48.5
		中学生	2.5	24.7	14.8	40.7	17.3	27.2	58.0
		高校生以上	3.1	22.3	25.4	36.9	12.3	25.4	49.2
	女性	就学前	2.0	13.3	30.6	43.9	10.2	15.3	54.1
		小学生	1.7	13.5	34.3	36.5	14.0	15.2	50.5
		中学生	0.0	15.9	25.4	55.6	3.2	15.9	58.8
		高校生以上	1.8	29.1	25.5	40.0	3.6	30.9	43.6

注:「設計済」は「ほとんど設計ができていない」と「ある程度設計ができていない」の合計割合(以下同じ)。「未設計」は「気にはしているが、あまり考えていない」「まったく考えていない」の合計割合(以下同じ)

## (2) 人生設計を考えることの効果

次に、人生設計を考えることの効果についてたずねた結果をみる。

晩産カップルの男女に最も多くあげられた点は「人生に起こる出来事に、必要な費用を確認できる」という点であり、男性の40.7%、女性の55.9%を占めた(図表6)。男女いずれも、「人生に、いつ頃、どんな出来事が起こるのかを考えることができる」

(男性 33.6%、女性 37.8%)がこれに続いている。晩産カップルの多くが、人生設計を考えることの最大の効果は、人生で必要となる費用や人生にいつどんな出来事が起こるのかについての見通しを立てられることにあると考えていることがわかる。

また、男性では「自分が働けなくなった場合の経済面でのリスクを意識できる」

(30.8%)、「自分の定年を意識できる」(25.2%)がこれらに続いたのに対し、女性では「家族が働けなくなった場合の経済面でのリスクを意識できる」(28.7%)、「家族の定年を意識できる」(22.6%)がこれらに続いた。男性では自身の、女性では配偶者の収入や就労継続期間を意識できる点をあげた人が多くなっている。なお、「特に効果はない」と答えた人は男性の30.8%、女性の15.9%であり、女性に比べて男性の方が人生設計の効果に否定的な評価をもつ人が多い傾向にある。

こうした傾向のなか、人生設計を考えることの効果について、「病気やケガなど、自分(家族)の健康面でのリスクを意識できる」という点をあげた人は男女とも2割に満たなかった。人生設計を考えることは、経済面や予測可能なライフイベントの時期に関する見通しを立てられることに効果があると感じている人が多いが、予測が難しい健康面でのリスクを意識できると感じている人は少ないことがわかる。

なお、これらの結果を性・人生設計の実施状況別に比較した場合、費用の面に関する効果をあげた人の割合は、人生設計の実施状況が「未設計」の人に比べて、「設計済」の人や「考え中」の人において高い傾向が確認された。

図表6 人生設計の効果(全体、性・人生設計の実施状況別)〈複数回答〉

(単位:%)

		を人生に起こる出来事に、必要な費用を確認できる	人生にかいつ頃、どんな出来事が起こるかをいつ頃、どんな出来事が起こるか意識できる	で自分が働けなくなった場合の経済面でのリスクを認識できる	で家族が働けなくなった場合の経済面でのリスクを認識できる	自分の定年を意識できる	病気やケガなど、自分の健康面でのリスクを意識できる	病気やケガなど、家族の健康面でのリスクを意識できる	家族の定年を意識できる	自分の寿命を意識できる	家族の寿命を意識できる	特に効果はない	
全体		47.6	35.5	26.4	19.1	19.3	17.7	14.9	13.2	11.4	7.9	24.0	
性別	男性	40.7	33.6	30.8	11.3	25.2	16.3	11.4	5.5	11.6	5.9	30.8	
	女性	55.9	37.8	21.1	28.7	12.2	19.3	19.1	22.6	11.2	10.4	15.9	
実人生設計状況別の	男性	設計済	50.0	<b>47.1</b>	<b>39.9</b>	15.9	<b>31.2</b>	20.3	15.2	10.9	18.8	8.7	18.8
		考え中	47.8	<b>46.0</b>	35.4	13.7	<b>30.4</b>	19.3	13.0	5.6	11.8	5.0	<u>12.4</u>
		未設計	<u>32.4</u>	<u>20.6</u>	24.0	<u>7.8</u>	19.6	12.8	8.8	<u>3.0</u>	8.1	5.1	<b>46.3</b>
	女性	設計済	<b>60.7</b>	38.1	22.6	<b>33.3</b>	10.7	20.2	16.7	<b>28.6</b>	10.7	7.1	<u>4.8</u>
		考え中	<b>62.3</b>	45.0	27.2	<b>33.1</b>	17.2	23.8	23.2	<b>26.5</b>	17.2	4.6	<u>6.0</u>
		未設計	50.6	33.5	17.1	24.5	9.7	16.3	16.3	19.1	17.8	8.9	25.3

注：全体値より10ポイント以上高い場合は太字表記、低い場合には下線表記

## (3) ライフイベント表の作成経験

図表7 調査画面で例示した「ライフイベント表」

## 1) ライフイベント表についての

## 知識と作成経験の有無

続いて、人生設計をより具体的に考えるための方法・ツールとして、特に、人生に起こるさまざまなライフイベントに必要な費用を考える際に用いられることの多い「ライフイベント表」の作成経験に関する回答結果をみる。

今回の調査では、回答者に「ライフイベント表」の例と簡単な説明を画面上に示した上で、「ライフイベント表」に関する知識と作成経験の有無、および作成経験がある場合には、どのような機会に作成したのかを複数回答でたずねた。画面で例示した「ライフイベント表」は図表7のとおりである。

調査の結果、「知っており、作成したことがある」と答えた人は10.7%にとどまり、「知っているが、作成したことはない」「知らないし、作成したこともない」と答えた人がそれぞれ32.2%、

57.1%を占めた（図表8）。晩産カップルのうち、「ライフイベント表」を知っている人は4割を超えるが、実際に作成した経験がある人はそのなかの一部に限られていることがわかる。

性・人生設計の実施状況別に比較してみると、人生設計について「設計済」と答えた人では作成経験者が男女とも25%を超え、「知っているが、作成したことはない」と答えた人を含めれば「ライフイベント表」について知っている人が6～7割を占めた。

「考え中」や「未設計」の人に比べて、「設計済」の人では作成経験者の割合も、知っている人の割合も大幅に高く、人生設計の実施状況とライフイベント表の作成経験や知識には、強い関連があることを確認できる。

自分の年齢 (歳)	家族の年齢(歳)			ライフイベント	必要費用
	配偶者	第1子	第2子		
18				就職	
19					
20					
21					
22					
23					
24				海外旅行	〇〇万円
25					
26					
27	26			結婚	〇〇〇万円
28	27				
29	28	0		長男誕生	〇〇万円
30	29	1			
31	30	2	0	長女誕生	〇〇万円
32	31	3	1	長男幼稚園入園	〇〇万円
33	32	4	2	車購入	〇〇〇万円
34	33	5	3	長女幼稚園入園	〇〇万円
35	34	6	4	長男小学校入学	〇〇万円
36	35	7	5		
37	36	8	6	長女小学校入学	〇〇万円
38	37	9	7	家族旅行	〇〇万円
39	38	10	8	住宅購入	〇〇〇〇万円
40	39	11	9		
41	40	12	10	長男中学校入学	〇〇万円
42	41	13	11		
43	42	14	12	長女中学校入学	〇〇万円
44	43	15	13	長男高校入学	〇〇万円
45	44	16	14	家族旅行	〇〇万円
46	45	17	15	長女高校入学	〇〇万円
47	46	18	16	長男大学入学	〇〇〇万円
48	47	19	17		
49	48	20	18	長女大学入学	〇〇〇万円
50	49	21	19	車買い替え	〇〇〇万円
51	50	22	20	長男就職	
52	51	23	21		
53	52	24	22	長女就職	
54	53	25	23		
55	54	26	24		
56	55	27	25	長男結婚	〇〇〇万円
57	56	28	26	住宅リフォーム	〇〇〇万円
58	57	29	27		
59	58	30	28	長女結婚	〇〇〇万円
60	59	31	29	定年退職、夫婦旅行	〇〇万円
				合計	〇〇〇〇万円

ただし、人生設計について「設計済」と答えた人であっても、実際に作成した経験がある人は4人に1人程度の水準であった。このことから、人生設計を立てている人であっても、ライフイベント表の作成経験をもつ人は少数派であることも確認された。

図表8 ライフイベント表の作成経験（全体、性別・性・人生設計の実施状況別）

		(単位:%)					
		あ作知	な作知	な作知	知	な作	
		る成っ	い成っ	い成ら	っ	い成	
		たお	たい	しない	て	・し	
		こり	こる	たい	い	計	
		と、	とが	こし	・	た	
		が	は、	と、	計	こ	
				も		と	
						が	
全体		10.7	32.2	57.1	42.9	89.3	
性別	男性	11.6	28.2	60.2	39.8	88.4	
	女性	9.6	37.0	53.5	46.6	90.5	
の性 実・ 施人 状況 別計	男性	設計済	26.1	38.4	35.5	64.5	73.9
		考え中	13.0	40.4	46.6	53.4	87.0
		未設計	4.1	16.9	79.1	21.0	96.0
	女性	設計済	25.7	41.9	32.4	67.6	74.3
		考え中	11.2	39.4	49.4	50.6	88.8
		未設計	4.3	24.2	71.4	28.5	95.6

## 2) 作成した機会

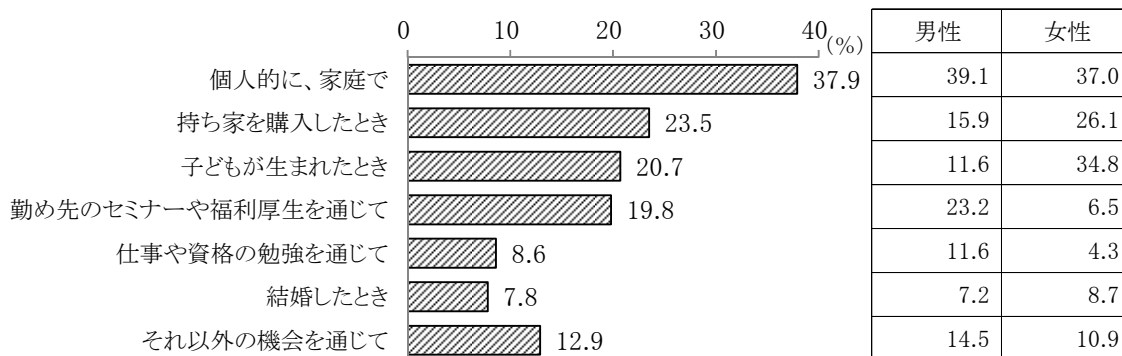
次に、「ライフイベント表」を作成した経験があると答えた人に注目し、どのような機会に作成したのかを複数回答でたずねた結果をみる。最も多くあげられたのは「個人的に、家庭で」(37.9%)であり、「持ち家を購入したとき」(23.5%)、「子どもが生まれたとき」(20.7%)がこれに続いている(図表9)。つまり、ライフイベント表を作成した経験をもつ晩産カップルの男女では、ライフイベント表を、結婚・出産といったライフイベントや勤め先の案内などの具体的なきっかけによらず作成した人が最も多いということになる。

サンプル数は限られるものの、性別に比較した場合、男女とも「個人的に、家庭で」(男性 39.1%、女性 37.0%)をあげた人が最も多い傾向は共通していたが、男性では「勤め先のセミナーや福利厚生を通じて」(23.2%)がこれに続くのに対し、女性では「子どもが生まれたとき」(34.8%)や「持ち家を購入したとき」(26.1%)などのライフイベントがこれに続いた。男性では「勤め先のセミナーや福利厚生」がライフイベント表を作成するきっかけの1つになっているが、女性の場合、働いていたり、働いていた経験があっても、人生設計について考えるようなセミナー等を受講する機会が少なかったのかもしれない。一方、女性では子どもを生む際に、就労を継続できない(しない)可能性について考える人が男性に比べて多いと考えられることから、男性に比べて子どもの誕生がライフイベント表の作成につながっているのかもしれない。



図表9 ライフイベント表の作成機会&lt;複数回答&gt;(全体、性別)

(単位:%)



注：回答者は、ライフイベント表について「知っており、作成した経験がある」と答えた116名（男性 69名、女性47名）。「それ以外の機会を通じて」に関する具体的な記述例としては「学校等の授業で」「自分・配偶者・子ども・親の病気・ケガ等経験」「親が亡くなったとき」「保険の加入・見直しのとき」など

## 4. まとめ

### (1) 晩産カップルの人生設計の実態

#### —子どもの誕生時に、成人時の自身の年齢を意識した人は半数以下

今回の調査では、近年増加する35歳以上の女性による出産に注目し、妻が35歳以上で子どもをもった40～50歳代の晩産カップルの人生設計の実態とその効果への意識について分析した。一般的に、経済面での人生設計では、末子の成人や独立の時期を十分意識した資金計画を行う必要があると指摘されてきた。子どもが成人や独立の時期が後ろずれする晩産型のカップルの場合には、そうした視点がより重要になると考えられる。しかし、今回の調査によれば、晩産カップルのうち、子どもの出産に際して「子どもが成人したときの自身の年齢」を意識していた人は、男性で4割弱、女性で5割弱にとどまっていた。また、晩産カップルの男女の人生設計の実施状況をみると、「設計済」の人は男女とも2割前後であり、「未設計」の人が半数前後を占めた。末子の学齢別に比較した場合、末子が高校生以上の時期を迎えた人においても、男性の約半数、女性の4割強は未設計の状況にある。

こうしたなか、晩産カップルのうち、人生設計について「設計済」と答えた人では、「人生に起こる出来事に、必要な費用を確認することができる」という点を効果としてあげた人が男性で5割、女性で6割を超えた。また、「人生に、いつ頃、どんな出来事が起こるのかを考えることができる」という点をあげた人も、男性で5割弱、女性で4割弱を占めた。人生設計を立てている晩産カップルの男女では、人生の費用面での見通しをたてることや、自身の人生設計に関する時間軸を意識できることへの効果を実感している人が多い。こうした視点を早くから意識することは、晩産カップルに限らず、多くの人にとって有益だといえよう。

なお、サンプル数は限られるが、人生設計について「設計済」と答え、かつライフ

イベント表の作成経験がある人の場合、人生設計の効果として「人生に起こる出来事に、必要な費用を確認することができる」という点をあげた人は7割を超えた（図表省略）。ライフイベント表の作成は、人生設計について早くから意識し、将来起こりうる具体的なライフイベントを想定する場合には、必要費用を確認できるという点で特に有益なようである。

## （2）人生設計の効果—意識しにくい、自分・家族の将来の「健康リスク」

人生設計の効果として、費用面の見通しがたてられることが高く評価された一方で、「病気やケガなど、自分や家族の健康面でのリスクを意識することができる」という点への評価は、人生設計について「設計済」の男女においても1～2割前後にとどまっていた。また、中高年期以降は、自身や配偶者に健康面での問題が生じたり、親に介護が必要な状況となる人が少なくないが、今回の調査結果では、晩産カップルの男女のうちこれらの点についてまで考えが及んでいる人はかなり少ないという事実も浮かび上がった。

具体的な調査結果をみると、子どもの出産に際して、「自分の健康・体力」を意識した人は女性の43.9%に対し、男性では25.9%、「配偶者の健康・体力」ではそれぞれ24.6%、11.8%に過ぎなかった。また、「子育ての期間中に家族に介護が必要になるかもしれないこと」を意識していた人にいたっては、女性の12.6%、男性の3.5%にとどまった。以上の結果から、晩産カップルの人生設計では、子どもの独立や成人の時期を意識して資金計画を行うとともに、ライフイベントとして意識したり、事前に予測することが難しい自分や家族の将来の健康リスクについても早い段階から意識して、備えを考えていくことが重要になるといえる。

（研究開発室 きたむら あきこ）

### 【注釈】

- \*1 金融広報中央委員会が全国の18～79歳の個人25,000人を対象として行った「金融リテラシー調査」（調査方法はインターネット調査、調査時期は2016年2月29日～3月17日）によると、「一般に人生の3大費用といえば、何を指すでしょうか（1つだけ）」という設問に3つの選択肢から正解である「子の教育費、住宅購入費、老後の生活費」を選んだ人の割合（正答率）は47.6%であった。
- \*2 対象者を妻が35歳以上で出産した既婚男女とした主な理由は、夫婦単位での人生設計を考える場合、末子が20歳を迎える時期が、両親が50代後半以降を迎える頃と想定されるためである（一般的に、夫婦の年齢は夫の方が妻より年上であるケースの方が多い）。

### 【参考文献】

- ・第一生命経済研究所編，2015，『ライフデザイン白書 2015年』ぎょうせい。